

みちしるべ文庫 二七

生き方が変わる

目次

一、死んでも生きてても神の中	1	一、神に義とされる	15
一、聖書の言葉	2	一、生き方が変わる	15
一、自分を信じる	3	一、黙って抱きかかて下さる	16
一、元気になりなさい	4	一、神は今も働き給う	17
一、神に願われている自分に気づく	5	一、神の愛こそ	18
一、病氣治しと信仰	6	一、よく完成させたいと思うなら	19
一、愛こそすべて	7	一、悪口を言わない	20
一、病人であることの自覚	8	一、思いやり	21
一、信仰の有り難さ	9	一、私は神に対して何をしたか	22
一、何でも出来る	10	一、天に駆けのぼる者	23
一、惑わされてはならない	12		
一、聞く耳を持つ	13		
一、もっと人生を大切にしよう	14		

死んでも生きてても神の中

松下昌義

神よ、怒ってわたしを責めないでください
憤って懲らしめないでください。

神よ、憐れんでください。

わたしは嘆き悲しんでいます。

神よ、癒してください、わたしの骨は恐れ
わたしの魂は恐れおののいています。

神よ、いつまでなのでしょう。

神よ、こちらを見てください、

わたしの魂を助け出してください。

あなたの慈しみにふさわしく わたしを救
ってください。

旧約聖書 詩編六篇

危険と困難とに満ちる人の世にあって、安心して
生きて行くための力となるのは、全能の神と一
緒に歩むことであります。

この詩の人は、素直に、全能の神さまと一緒
に日々を歩んでいます。幼き者が母に抱かれてい
るように、全能の神と一緒にです。

彼は、自分に迫り来る危険と困難にたいして、
自分一人で立ち向かうのではなく、先ず全能の神の

前にすべてを持ち出し、御一緒に働いてくださる
神さまのもとで対処しようとしています。

×

神よ、いつまでなのでしょう。

神よ、こちらを見てください。

わたしの魂を助けだしてください。

あなたの慈しみにふさわしく わたしを救
いだしてください。

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

×

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

「神さま、こちらを見てください」という叫び
は、彼の神への全幅の信頼にもとづく求めなので
あります。

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

彼の祈りと求めは、彼の神にたいする信頼のす
がたであります。これほどに、神を身近に覚え、
神の中に自分のすべてを置いて生きているしるし
であります。

×

まことの神は、理屈や教義の中にはおられませ
ん。命が躍動し滾るそこに、神は光り輝いておら
れます。神は、わたしの泣く声と嘆きとを聞き、
わたしの祈りを受入れ、何時までも共に歩んでく
ださいます。死んでも生きてても神の中です。

まことの神は、理屈や教義の中にはおられませ
ん。命が躍動し滾るそこに、神は光り輝いておら
れます。神は、わたしの泣く声と嘆きとを聞き、
わたしの祈りを受入れ、何時までも共に歩んでく
ださいます。死んでも生きてても神の中です。

まことの神は、理屈や教義の中にはおられませ
ん。命が躍動し滾るそこに、神は光り輝いておら
れます。神は、わたしの泣く声と嘆きとを聞き、
わたしの祈りを受入れ、何時までも共に歩んでく
ださいます。死んでも生きてても神の中です。

まことの神は、理屈や教義の中にはおられませ
ん。命が躍動し滾るそこに、神は光り輝いておら
れます。神は、わたしの泣く声と嘆きとを聞き、
わたしの祈りを受入れ、何時までも共に歩んでく
ださいます。死んでも生きてても神の中です。

まことの神は、理屈や教義の中にはおられませ
ん。命が躍動し滾るそこに、神は光り輝いておら
れます。神は、わたしの泣く声と嘆きとを聞き、
わたしの祈りを受入れ、何時までも共に歩んでく
ださいます。死んでも生きてても神の中です。

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、開かれる。

門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

あなたがたのだけれど、パンを欲しがると自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがると、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。

× マタイによる福音書七章七節以下

× なんと有り難い言葉でしょう。真正面から、真剣にこの言葉を受けるなら、かならず、生き方が変わるでしょう。

× なんと優しさに満ちた言葉でしょう。謙虚になつて、この言葉を受けるなら、かならず、生きる希望と力とが与えられるでしょう。

× なんと愛に満ちた言葉でしょう。素直になつてこの言葉を、くりかえしとなえるなら、その人の

心は平安になるでしょう。

× 生活のうわべで、このお言葉を聞いてはなりません。ただ頭だけで、この言葉を理解してはなりません。信頼と畏敬の思いをもって全身でこの言葉をうけとめるのです。

× 与えようとするとする神はすでに、私たちに多くを与えておいでになり、今も与え続けておいでになります。今、ここに自分が生かされていることもそのしるしにほかなりません。

× すでに与えられているということに気づき、その思いを自分の内に充滿させるなら、自然に「求める人」に変えられるでしょう。

× 自分の努力で「求める」自分にならうとしてはいけません。「生かしてくださっている」大いなる命の働きに畏敬を覚えるとき、「求める自分」が、自分の中に生まれて来るのです。

× 「求める自分」を生み出す言葉こそ聖書の言葉です。静かな場所に身を置いて、真心こめて一言、唱えるように冒頭のイエスの言葉を読んでみましょう。平安と力とがあなたの内に生まれてくるでしょう。



自分を信じる

松下昌義

イエスは百人隊長に言われた、「帰らなさい。あなたが信じたとおりに成るように」
ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。

— マタイによる福音書八章十三節 —

「信じること」を失った人は不幸な人です。自分を信じる事が出来なくなつた人は、最も不幸な人です。

自分を信じるとは、自分に神が与えて下さった可能性を信じることで、ただ無闇に自分を信じることではない。ただ無闇に自分を信じるだけならそれは智慧無き誇大妄想に過ぎないでしょう。

×
神から与えられた自分の内にある素質と力とが、自分に対する不信によって、開放されないままでいることを、あなたは知らない。その事実が気づくことが自分を信じることである。

神は、それぞれに創造的な力と素質とを与えてくださっており、その素質と力とを活性化させることを、神は最も願っておられる。そればかりか、そのような自分を信じて立ち上がるなら、神はそれに応えて、必要な智慧と機会とを備えてあなた

を助けてくださるでしょう。

×
「なし得ない」と自分を押さえつけ、自分を限定する人は自分に下さっている賜物を、穴を掘って隠した人である。何事も敢えてせず。恐れ、何も信ぜず、ただ、じっとしている人は、自分の人生をどぶに捨てたような人です。(マタイ福音書二十五章十四節以下参照)

×
宇宙は創造的で肯定的な命の漲りであります。その命に自分も生かされている者であることを知ることが宗教的生き方基本であります。

×
命の成長の為には、さまざまな場と時とを通過しなくてはなりません。困難と苦難、失敗と誤りなどがそれであります。それらを通過しないで、葉を繁らせ、花を咲かせ、果実を得ようとし、幹を太らせようとする人は、闇の中で植物を育て果実を得ようとする人と同じです。

×
「あなたの信じたとおりに成るように」と神はあなたを応援しておられる。それはあなたの命の満開を願う「助け主」の創造的な御手です。
何時も、神に生かされている自分を信じて業をなそう。



元氣になりなさい

松下昌義

「娘よ、元氣になりなさい。あなたの信仰があなたを救った」そのとき、彼女は治った。

—マタイによる福音書九章二二節以下—

最近、日本の知性を代表すると言われている方が、自らの手で自分の命を断たれた。そこに至った本当の理由については、誰も軽々に語ることは出来ません。

それにしても、誰でも自分の人生のさまざまな経験積み重ね歳をとるにしたがい、若いときには感じなかった、人生の空しさを覚えるようになります。肉体の衰えと同時に、精神の空虚さ、注ぎて行く意味の喪失。その結果、人は、人生を諦めて、ただ死を待つだけとなりかねません。ここでは、この世の知性は何の役にも立たなくなってしまう。そして最後に知性が選択する決断は「自ら命を断つ」とことで、知性自らの面目を保とうとするのかも知れませんが、結局それは敗北ということではないでしょうか。

自らの命を断つた方で、身近に知られている人に、例えば有島武郎、芥川龍之介、大宰治、川端康成、といった方がいます。ひよっとすると、大方の知性の人は、そのような人達の生き方、死に方に、ある種の羨望（強いうらやみの気持ち）をいだいておられるかも知れません。

人生を、真面目に突き詰めて考えてしまうと、

生きることの空しさに突き当たるのではないのでしょうか。結局、ほどほどに考え、楽しく今を生きることしか考えない者だけが生きて行けるのがこの世なのではないでしょうか。

でも、人生の現実には、歳を重ね、身体の衰えとともに、人生を深く考えさせることを迫って来ます。ひよっとすると、今後、私たちの周りで、自分で自分の命を断つ方が、今よりももっと増えて来るのでは、と案じます。

人生は決して虚無ではありません。しかし、死ぬことを計算に出来ないで、自分の命を生きている者には、人生は虚無となります。

私たちが生きている「命」とは、神さまがしつらえて下さった、この世の舞台に、それぞれが祝福され、約束を帯びて生み出されている者です。

私たちの命は、もともと私でない神さまの命が、私という者に恵み与えられ、「生きなさい」と祝福されて有る者です。にもかかわらず、その命を「自分の命」でもあるかのように、狭いこの世の中に閉じ込めて、虚無だ、無意味だ、絶望だ、と騒ぎ立てるのは、本当の命の芯、命の偉大さ、もつたいなき、有り難さ、畏れに開眼していかないからでありましょう。

この世で肉体をその形としてとる命は、壮絶であり悲惨であり、極度な苦痛でさえあります。しかし、与えられた命そのものは栄光に充滿しているのです。それに開眼する事が信仰です。

神に願われて 自分に気づく

松下昌義

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに來なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙虚な者だから、わたしの軛くわを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。

— マタイによる福音書十一章二十八節以下

自分とはどのような者であるか。それは、神に願いをかけられている者である、というのがイエス様の教えです。私が神に願いをかける前に、すでに神に願いをかけられている者が自分であることに気づく、これが信仰であります。

「這はえば立て、立てば歩けの親心」とは、親が我が子にかける願いです。この親の願い心によって子供が育つように、人は神の願い心によって育つて行くのです。

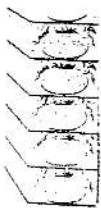
神に願いをかけられている自分に気づくということ、自分の存在の根拠、自分の存在理由を見

出すことです。また、それは自分の生きていく意味を悟らせ、同時に、生きる勇氣と希望とを得ることでもあります。

イエス様がおっしゃる「休ませてあげよう」とは「あなたに勇氣と希望とを与えてあげましょう」と言う意味です。また、「わたしの軛くわを負うてわたしに従いなさい」とは、「神さまに願いをかけられている自分に気づいて安心して生きなさい」という有り難いお言葉です。

「あのように成りたい」「このようになさねばならぬ」と願うだけでは、不安や失望を生むだけです。人は自分の人生で多くの願いを持っており、そのために努力しなければなりません。しかし、願いをかけるだけの者が自分なのでなく、その前に、目に見えない神さまに願いをかけられている自分に気づくことを第一におくことが肝要です。

神さまは善い者にも悪い者にも雨を降らせ、太陽を昇らせ照らして下さっています。どのような時にも、神に願われている自分をかたく信じて、足を地に、心を天に向け喜びをもって生かされてまいりましょう。



病氣治しと信仰

松下昌義

悪魔、引き下がれ。あなたは神に心を向けず、人間にこそを向けている

— マタイによる福音書十六章二三節 —

どのような病氣の人であろうと、私がある人に触れるとき、忽ち、その病が癒えるなら、おそろしく私の居るところへ多くの人々が殺到することでしょう。そこが教会なら、その教会は人々で満ちあふれ、聖書が告知する神をそれらの人々は直ぐに信じ、喜んで信徒になるでしょう。しかし、私に癒す力が無くなれば、人々はいろいろな理由をつけて去ってしまうでしょう。また、たとえ癒す力が無くならなくても、その信仰の故に極度な不利益が自分に降りかかるような事態になれば、知らぬ間に一人も居なくなるでしょう。結局、神や仏を信ずる時でさえ「自分の為」であり、自分にとって都合のよい部分だけを取り込み、それ以外はポイと吐き捨てるのが人です。

イエスさまのおいになる所には、何時も多くの人々が集まり、慰めや食べ物を受け、さまざまに苦しみを癒されました。しかし、イエスさまが十字架刑に処せられることを知るや、人々はイエスを見捨て、弟子達でさえ逃げてしまいました。人はただ自分自身に向くだけで、本当に神に向いてはいません。信仰は、自分に向くことではなく、

自分を神に向けることです。自分の願いや意見を主張する事ではなく、又自分の死後の安心を得るためでもありません。この一点を見失った宗教や信仰は、忽ち「悪魔」となります。

自分に利益があるからそれをする、ということはこの世の姿です。しかし神さまと人間との関係は損得の関係ではありません。ではどのような関係なのか、それは、「自分が今生きている」というその事実の故に「神に有り難い」と感謝する関係です。生きているそこには喜びだけでなく、苦しみや悲しみ、そして病み死ぬということも含まれています。そのすべての生が有り難いということ。これは理屈ではなく、事実なのです。このところを間違うと、神も仏も自分の利益のために利用するだけとなります。

イエスは神を伝えるその初めに山上で試みを受けられた。パンの試み、その内容は肉体の健康や富について。次に精神の試み、その内容は名誉を受けること。最後は宗教についての試み、その内容は聖人となること。しかしイエスは言われた。退け、悪魔。あなたの神である神を拝し、ただ神にのみ仕えよ。

— マタイによる福音書四章十節以下 —
最後に残るのは、自分に向けた思いではなく、神に向けた思いだけです。今静かに自分の生きざまを深く敲しく神の前で省みています。



愛こそすべて

松下昌義

新約聖書の福音書に登場するイエス様の弟子達を見てみますと、誰もが強い信仰の持ち主だとは言えません。悲しんだり、信じきれなかったり、おじけついたり、落胆したり、保身のために裏切ったり、まどったり、欲に振り回されたり、最後にはイエスを捨ててみんな逃げてしまいました。

このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

— マタイによる福音書二六章五六節 —

この聖書の言葉は、まことに強烈です。

×

しかし、イエス様はそのような弟子を最後まで愛しぬかれました。

超越すゑこの祭りの前のことである。イエスは、

この世から神のもとへ移る御自身の時が来たことを悟り、世にいる弟子達を愛して、この上なく愛し抜かれた。

— ヨハネ福音書一三章一節 —

×

自分を完全に裏切っているイスカリオテのユダ

を、万感の思いで愛を注ぎつつ、その足を丁寧に洗あらいいになりました。皮肉くわくでもありません。当

てつけでもありません。恰好かたじけをつけられてのことでもありません。ただ、ユダを愛して、愛して愛し抜かれたのです。イエスさまありがとうございませ

×

イエスを否んだペテロ。その三度めには、

×

ペテロはイエス名なを呪う言葉さえ口にしなから、「そんな人は知らない」と誓いはじめた。

— マタイによる福音書二六章七四節 —

しかし、そのペテロの苦しみを知っておられ、ご自分が復活かっくわつなされたとき、「ペテロに一番に知らせてやりなさい」と、マグダラのマリヤに命じられました。

×

×

イエスさまは愛を説かれのではなく、愛となつて愛を生なきたのです。悲しみに喜びをもたらずのは愛です。不信を信仰に変えるのも愛です。

恐れこゝろと惑まよいに勇気ゆうきを与えるのも愛です。落胆らくたんに希望きぼうを与えるのも愛です。罪をおかした者にゆるしを与えるのも愛です。死の不安に希望きぼうを与えるのも愛です。弟子たちはイエスさまの愛によって栄光えいこうの人生じんせいを生なきる者へと変えられました。彼らは今もその愛を天あまにあって賛美さんびし続けています。



「病人」であることの自覚

松下昌義

イエスはお答えになつた。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

—マルコによる福音書二章十七節—

古代ギリシヤの哲学者ディオゲネスについて興味深い話が伝わっている。彼は昼間、火を灯したランプを持ってアテネの大通りを何か探すような様子で歩いていた。人が不思議に思い「何をしているのか」と尋ねると、彼は真剣な顔で「人間を探しているのだ」と答えた。

彼が探していたのは、人間らしい人間です。よくよく考えてみますと、何時の時代にも人間の顔をした人は居ても、人間らしい人がいないことに気づきます。

「人多き人のなかにぞ人ぞ無き、人となれ人、人となせ人」という昔の歌がありますが、これは人間の悲痛な叫びであり、多くの人の願いでもありましょう。「人らしい人」のことをイエスは、「健康な人」と言われ、「人らしくない人」のこ

とを「病人」と言われました。とすると、この世のすべての人が「病人」だと思われれます。

世の中には立派なことを言い、善いと思われることを行い、多くの知識を以て難しいことを語る人達が沢山いらっしゃいますが、所詮は「病人」にしかすぎない事を私たちは知っています。なぜなら、どのような人も「我が思い人の思い」だからです。つまり、誰もが「我が思い」の不純さを密かに自覚しているからです。

思いめぐらすとき、人間はその初めから何千年もの間「病人」で有りつづけて来たようです。人間が持っている知性や感性それに意思の力も、人間の不健康さを癒すことは出来ず、一見人間が進歩したように思えても、その初めと変わることもなく憎しみ、争い、妬み、嫉み、ふしだらなど様々な利己的欲望に振り回されつづけており、本当の平安を何処にも見出すことは出来ません。

自分が「健康な人」だと思ふな。自分が「不治の病人」だと知れ、と聖書は言うのです。だからこそ、神は人を愛され、癒すために手をさしのべて下さるのです。神の愛を仰がず、なおも自分の知恵で健康な人になれると思ひ込んで生きつづけるなら、人間は必ず自滅してしまふでしょう。



信仰の有り難さ

松下昌義

皆、わたしの言うことを聞いて悟りなき
い。外から人の体に入るもので人を汚す
ことが出来るものは何もなく、人の中か
ら出て来るものが、人を汚すのである。
：人から出て来るものこそ、人を汚す。
中から、つまり人間の心から、悪い思い
が出て来るからである。みだらな思い、
盗み、殺意、姦淫、貪欲、詐欺、好色、
ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これ
らの悪はみな中から出て来て、人を汚す
のである。

—マルコによる福音書七章十四節以下—

一般に「汚れる」とは、そのものが持っている
聖さや美しさが損なわれ、失われてしまうことを
言います。

神さまは私たちに神を敬い、真実なるもの、美
しいものを喜ぶ心を与えて下さいました。しかし
人は汚れてしまい、神を畏敬うことを捨て、自分
の思いの満足だけを求める者となってしまいました
た。聖書はこのような人間の姿を、神の願いに反
した「罪人」と申しています。

私たちは、そのほとんどの事を、外から取り入
れ自分のものとしします。さまざまな知識、いろい
ろな経験、それらは外から取り込むものです。
しかし、問題は、私たちが取り込むそれらでは
なく、それを受け取る私たちの内なる心にあります。
す。

「内なる心」とは人の根性のことで、人の根本
的なものの考え方、つまり心根を意味しています。
心の根っこが汚れていては、どんな善良なもの
を心に入れても、自分の利欲のために用いてしま
いますから、これは一大事であります。例えば、
どんなに素晴らしいことを行っても「結局は
自分自身の満足のため」という恐ろしい事実が隠
されてあるのです。

人間はどんなことも自分の満足のために利用し
ます。神さえも、仏さえもです。正義や善など言
うに及びません。

イエス・キリストさまは、人間の汚れた心根に
思いを向け、その心根の救いのために、神さまよ
り遣わされたお方として、お働きになりました。
信仰とは、汚れた心根を聖めていただける神を敬
い、よりたのみ、感謝することです。



何でも出来る

松下昌義

「お出来になるなら、わたしどもを憐れんでお助け下さい」。イエスは言われた「できるば、と言うか、信する者にはなんでもできる」。その人は叫んだ。「信じます。

信仰のないわたしをお助けください」。

マルコによる福音書九章二二節以下

人が神の大いなる命の働きに、自分を完全に明け渡すとき、その人は大いなる命の働きの器となります。どの人も神の器になるように創造されており、ここに人間の素晴らしさがあります。しかし、多くの人がそのような自分に気づいていない、というところに人間の悲惨があります。

人はすぐに自分の智慧や力、経験などを振り回し、おまけに、自分の楽しみ、自分の利益のためにのみ努力しようとします。そうすることによってどの人も、神の大いなる働きから、自分自身を遠ざけているのです。「これだけ努力しているのに」「これだけ祈っているのに」と思えば思うほど、その人は神の大いなる命の働きから自分を遠ざけ、ますます貧弱な自分になっています。

イエスが言われる「信仰」とは、自分の智慧や力、自分の望みや願いを先立たせて、それを成就するために神を信する「信仰」ではなく、神によって初めから躍動している大いなる命に、自分ですっかり委ねて生きることを「信仰」と言われるのです。

「信じます」とは、自分の我を捨て、初めから神に与えられ、備えられ、それによって生かされている、神の命の道理に自分の命を委ねます、ということですから。そのときこそ、「人は何でも出来る」のです。

得られないのは願い求めないからです。願ひ求めても与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願ひ求めるからです。ヤコブ四・二

どの人にも与えられ備えられている神の命の道理に生かされるなら、もはや、どのような悲惨も無くなってしまおうでしょう。「無くなる」とは、それに振り回されず正しく対応出来るようになる。「知恵」を得ることです。「自分の願いどおりに生きられない」と愚痴ぐちっている限り、その人はいつまでも救われることはないでしょう。



感^{まど}わされてはならない

松下昌義

人に感^{まど}わされないように気をつけなさい。
わたしの名を名乗る者が大勢現れ「わたし
が救い主だ」と言つて、多くの人を感^{まど}わす
だろ。戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞い
ても、慌^{おそ}ててはいけなさい。そういうことは
起こるに決ま^まつている。だがまだ世の終わ
りではない。……そのとき「見よ、ここに
救い主がいる」「見よ、あすこ^まだ」と言
つ者が^{おそ}い^{おそ}い、信じてはならない。偽^{いつはり}救い
主や偽^{いつはり}預言者が現れて、しるしや不思議な
業^{わざ}を行い、人をまどわそうとする。あなた
方は気をつけなさい。一切のことを前もつ
て言つておく。

—マルコによる福音書一三章五節以下—

「〇〇が何年何月に起こる。私は神のお告げを
受けた」などと、真面目に、又は意図的に語る人
がいます。それを本当だと信じる人がいて、さま
ざまな社会的不安と混乱とが生じることがありま
す。

しかし、それらのほとんどは、結局「何も起こ
らなかつた」事で過ぎ去つて行きます。でも、同
じ事が次々と繰り返されます。

×

それにしても、なぜ同じことが繰り返されるの
でしょう。確かなことは分かりませんが、おそ
らく何時の時代でも、人は自分の存在や人生の現

在と将来について持っている「不安」が、「〇〇
が起こる」という言葉に反応して、「ひよつとし
たら、本当に起こるのではないか」と、疑いつつ
も思つてしまふのでしよう。

×

としますと、問題の原因は、自分自身に潜^{ひそ}む、
自分についての「不安」です。もし、「あなたは、
今、本当に幸福ですか」「あなたは、今、安心を
お持ちですか」と、真面目に問われたら「はい」
と確信をもつて答えられるでしようか。

×

イエス様は何度も、「恐れることはありません」
「心配せずにいなさい」「安心して行きなさい」
と、多くの人に申されました。それは、人間の誰
もが、うわべはともかく、その思いの内に「不安」
や「恐れ」「悔い」「悩み哀しみ」等を引きずり
ながら生きていることをよく知つておられたから
です。

×

「心配はいりません」とイエス様が申されると
き、それは「すべてを神様におゆだねしなさい」。
そうすれば、神は、最も善いように貴方を守つて
くださいます」と言つておられるのです。

×

何時何が起こるか、人間に分からないのが人生
です。しかし、いつなが起こつても安心してお
任せ出来る神さまを自分に戴^かいていることは、何
にも優る宝です。見えない神さまの愛に目覚め、
不安をもちつつもなお、安心して生きる力と希望
とを得ることが信仰ということ。×

聞く耳を持つ

松下昌義

あなたがたは聞くには聞くが決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。

この民の心は鈍くなり、その耳は聞こえにくく、その目は閉じている。それは、彼らが見ず、耳で聞かず、心で悟らず、悔い改めて癒されることがないためである。

マタイによる福音書十三章十四節

×

人生にはいろいろな事が起こります。嬉しいこと、悲しいこと、その内容と形とは様々です。

しかし、人生で出会う悲しい事に恨み嘆き、わたしは何と運が悪いのだろうと思ひ、また、嬉しい事に出会えば、わたしは付いていると、思うだけなら、その人は必ず、失望のうちに自分の人生を終わることになります。なぜなら、どのような人も最後には必ず死んでしまうのですから。

×

×

さまざまな事が起こる人生を幸いに、且つ、意義深く生きる秘訣があります。それは、悲しい事が起こらず、嬉しい事ばかりが起こることを願うのではなくて、自分が出会う出来事が持っている、自分に対するメッセージを聞く耳をもつことです。

それが悲しいこと、自分にとって不利益なこと又は、不条理なことであつたとしても、そこには必ず、自分に対する大切な語りかけが秘められています。

×

×

冒頭に紹介したイエスキヤの言葉は、その事を示しています。「聞く耳を持ちなさい」「見る目を持ちなさい」「悟る知恵を持ちなさい」と言います。

「聞く」とは、出来事が語っている事柄に聞き従いなさい、と言うことです。「見る」とは出来事が秘めていることを見抜きなさいということですから。そして「悟る」とは、出来事を通して与えられる事を理解しなさい、ということですから。それらに共通していることは、自分の願いや意見、自分の主張や理屈で分析して聞くのではなく、それ自身が開示していることを謙虚に受け取るということですから。

このような耳や目、悟りを持つためには、人々がただ知識をたくさん得てもだめです。深い宗教的が眼力を、大いなる方より頂かなければなりません。聖書は、その眼力を与えようとしているのです。それを得れば、その人は人生の出来事が秘めている神の祝福に気づくでしょう。



もっとと 人生を

大切にしよう

松下昌義

人の子（イエス・キリスト）を裏切るその者は不幸だ。生まれなかつた方が、その人のために良かった。

— マルコによる福音書十四章二十一節 —

これは、キリストがユダに語った言葉ですが、ユダを責めておいでになるのではなく、人がこの世に生まれ来た意義を語っておられるのです。

× ×

わたしたちがこの世に生まれて来たのは、決して偶然のことではありません。見えない神の御計画によって、どの人もこの世に送り出されて来たのです。しかし、私たちの意識は神の御計画に気づかないで生きています。

どの人にも備えられている神の御計画とは何なのでしょう。それは、神の愛に生かされている自分の命の偉大さ、有り難さに気づき、そして、さらに自分の命を光り輝かすことであります。

このような生き方を聖書は「神に従う人の道は輝き出る光、進むほどに光は増し、真昼の輝きとなる」（箴言四・一八）と言ひ、又、「私たちは神の作品であつて、良い行いをするためにキリス

ト・イエスにあつて造られたのです」（エフェソ二・一〇）と示しています。

× 人生は本当の命に到る壮大な旅であります。まさに、使徒パウロが言つたように私たちは「神の国に到る旅人」なのです。

しかし、多くの人は、このような人生の秘儀ともいうべき、有り難き意義に気づくことなく、この世を、自分の感覚的な楽しみを満たす場とするだけで、この世に捕らわれ、旅の途中で滅びんとしています。この様は、その人にとつても、送りだされた神にとつても、まことに残念なことであります。

× ×

キリストを裏切つたユダはそのような人間の悲惨な姿の代表であります。ですから、キリストが万感の思いを持って、「神の御計画に気づくことなく、それを裏切る者は不幸だ。その人は生まれ来なかつた方が良かった」とユダのみならず、私たちの為にも嘆かれたのです。

× ×

互いに自分の人生をもっと大切に生きたいと思ひます。聖書の知恵をいただいて、人生の偉大で、有り難い旅路を完成したいと思ひます。



神に 義とされる者

松 下 昌 義

神さま、罪人のわたしを憐れんでください。

—ルカによる福音書一八章一三節—

「嫌な人」の最たる者は「ごうまんな人」ではないでしょうか。「傲慢」という言葉を国語辞典に引きますと「偉いのは自分だけだというような気持ちで、なんでも自己本位に行動する様子」とあります。なるほどと思います。でも、私たちはすぐに「ごうまんな人」になりかねません。

聖書は、人間はどのような人も「罪人」であるとして示しています。聖書が言う「罪」とは、「的をはずす」ということ。心や靈魂の神よりはなれた間違った状態」のことをさしているようですが、漢字の「罪」の方をみますと、それは「四つの非」と書き、その非なる四つとは、「我痴」つまり、自分がどのような者であるかに気づいていない者。「我見」つまり、自分の意見を主張して、他人の意見に耳を傾けない者。「我慢」つまり、ごうまんな者。「我愛」つまり、自分にだけ執着している者のことだそうです。とすると、「人間はみんな罪人です」という聖書の教えには納得がいきません。あの人は、この人はと、いろいろ非難攻撃しますが、「罪人」つまり、嫌な人は他でもなく自

分自身の姿であることに気づきます。

聖書の教えは、「罪人」である人間を責めているわけではありません。また、正しい人間になりなさいと勧めることを第一にしているではありません。そうではなく、「自分が罪人であるということによくよく気づきなさい」ということを聖書は説いているのです。さらに「罪人であるにもかかわらず、神はあなたを赦していただきますよ」という神さまの愛を説いているのです。

常に神さまに謝る心をもって生きる人生。神さまに赦されて生かされていることに感謝出来る日々が過ごせますようにと、願われているのがイエス・キリストさまであります。

神さまに謝る心と感謝する心、それを「謝念」というなら、その念から生きる喜び、生きる力、生きる希望、生きる平安が自然に生まれて来るのだと思います。

冒頭にある祈りを捧げた人を見ておられたイエスさまは、「この人こそ神に義（よし）とされた」ともうされました。是非、先に掲げた聖書の箇所をご覧ください。



生き方が変わる

松下昌義

ザアカイは立ち上がって、イエスに言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」イエスは言われた。

「今日、救いがこの家に訪れた」

ルカによる福音書十九章八節以下

聖書に登場するザアカイは貪欲な徴税人でした。この世で唯一頼りになるのはお金だと信じている人でした。お金がこの世でどれほどの大切なものかはだれもが知っています。人は、お金の為に泣き、笑い恨み、友情が壊れ、愛すら空しくしてしまい、遂に殺人にいたることもあります。

お金の威力を人に倍して知っているそのザアカイが、自分の財産の半分を貧しい人に与え、悪事で他人から騙し取ったお金は四倍にして返します、と言いだしたのです。一体、ザアカイの心の内に何が起こったのでしょうか。

×

×

その秘密は愛です。誠実な愛にザアカイは触れ、その愛が、本当の命の世界をザアカイに発見させ

たのです。

×

×

お金よりも大切なものが本当の命の世界であると言うのではありません。本当の命の世界は、この世の何かと比較出来るものでなく、比較して何方を選び取るか、と言うようなものでもないのです。本当の命の世界は私たちの足元に何時もあるのです。この世ばかりを見ている目を一転するならば、恵みに恵みを降り注ぎ、過去から現在、そして未来永劫に自分を全くの無償で生かし続けている大いなる命を、目前に見ることが出来ます。それは有り難きものであり、その命の事実は「真の愛」としか言いようがないのです。

×

×

イエスさまは、その真の愛と化して、ザアカイの貪欲な心にもぐり込み、その貪欲さを愛で変容してしまつたのです。イエスとの出会いは彼にとつて真の愛との出会いだつたのです。

ザアカイの貪欲が消えて無くなつたのではありません。彼の貪欲が清められ、与えられた自分の命の使い方、お金の使い方、つまり生き方が変わったのです。すべてのことに感謝出来る人になりました。だからこそイエスは「今日、この家に救いが訪れた」と歎喜されたのです。



黙って抱きかかえて下さる

松下昌義

わたしは、失われた者を捜し出して救うために来たのである。

—ルカによる福音書一九章一〇節

生きて行くうえで、ぶつかると問題が大きく分けると二つになります。それは、人生に於ける問題と、人生そのものの問題、です。人生に於ける問題とは、食べること、着ること、住むこと、人と付き合うこと、さらに病むこと等。これらは生きて行くうえで誰れもが経験する悩みであります。この問題に対しては、私たちは知識と智慧とをもって賢明に対処し、解決へと努力しなければなりません。

では、人生そのものの問題、とは何かと申しますと、人間存在その事が根本的に抱えている、老いや死、さらに他の動植物などを殺さなくてはならない宿命、加えて利己的にならざるを得ないという悲しき、愚かさです。これらは人間であることの悩みであり、私たちの知識や努力ではどうすることも出来ない問題であります。

この二つの人間の問題のうち、宗教が関わるのは後のほうの問題に救いの手を差し延べることで

×

×

ところが、人は、自分の思慮分別でもって解決へと努力しなくてはならぬ人生に於ける問題を、宗教や信仰で解決してもらおうと、神や仏を持ち出すのです。これは愚かなことです。それは、自分で何一つ努力しないので、ただ天を仰いで口を開け食べ物が落ちて来るのを待っている怠惰な者と同じです。世間には、信ずれば金持ちになり、立身出世や願ひ事のすべて叶えられると宣伝し、人を集める宗教が後を絶つことなく起こり、多くの人がそれに引かれ大小の「宗教」を求めて西へ東へと走り回ります。

×

×

宗教の「宗」を「心根」と読む方がおられます。つまり、「宗教」とは人の「心根を救う教え」ということです。「心の奥開いて覗けば鬼が本尊」とありますが、まことに人の心根は、底知れぬ利己心が渦巻き荒れ狂っています。「この死の身体から誰が救われるだろうか、ああ悲しいことだ」と人間存在の悲惨さを嘆じたのは使徒パウロでした。しかし、パウロは、その鬼のような人間をいとおしみ「心配いりませんよ。安心しなさい」と、そのまま優しく抱きかかえて下さる神さまに、イエスを通して出会ったのです。今も、キリストの語りかけは、私たちに投げかけられています。無心になって耳を澄ます時その声が心聞こえて来ることでしよう。



神は今も働き給う

松下昌義

わたしの父は今もお働いておられる。だから、わたしも働く。

—ヨハネによる福音書5章一七節—

すべてが、見えないものの働きによって成り立っていることに気づく、これほど偉大で嬉しいことはありません。見えない神さまが、私のためにどんなに多くのことをしてくださったか、どんなに多くのことを与えてくださったか、ということに気づくことは、他のどんな喜びよりも嬉しいことであり、私たちを本当の感謝と平安の生活へと変えていきます。

×

×

このような神さまのかぎりないお恵みは、今も私の内に、また外に働き、私を育て下さっています。イエスさまはそのような、私たちの人生に於ける事実を、「わたしの父（神）は、今もなお働いておられる」と申されました。

自分がすべてを創りだし成し遂げて来たのだ、と思うことほど傲慢はありません。それは、親の前で、自分は独りで大きく成ったのだ、と威張るようなものです。どれほど親の努力と忍耐と犠牲

とによる愛情で今日まで育まれて来たことかということを、子供は気づかねばなりません。同じように、見えない神さまが、今日まで与えてくださった数々の恵みの働きを思い計りたいものです。

×

×

神さまとは命のたぎりです。命のたぎりは、万物を創造され、保持され、完成されるといふ働きに観ることが出来ます。命のたぎりは、天地のすべてのものに及んでいます。無生物の存在のそこに、植物の成長する姿のそこに、動物の感覚作用のそこに、私たち人間の考える能力のそこに。神様の働きは過去のことではなく、今のことであり、未来永劫にわたってのことです。

この大いなる命の恵みの働きに気づくとき、私たちは人生に安心を得ることが出来ます。

「神さま、わたしのすべてをおゆだねいたします。それゆえ、わたしは、安心して一生懸命に生きます。ありがとうございます。」という祈りが生活に生まれ、それが、わたしの生きる力と希望になります。このような神さまの働きを知っておられたので、「だから、わたしも働くのです」と、イエスさまは言われました。

わたしの父は今も働いておられる。だから、わたしも働くのである。

—合掌—

神の愛こそ

松下昌義

神の愛の内に留まっていなさい。

—ヨハネによる福音書一五章九節—

この世にあっても、あの世にあっても、私たちが信頼できる慰めは神だけです。

×

×

この世のなかに、私たちを最後まで保証してくれるものは何もありません。すべては儂く過ぎ去って行きます。まさに、この世は、思うようにならず、辛く悲しい「憂き世」であります。この人生の嚴肅な事実を、私たちはしっかりと心得て、この世を生きねばなりません。

にも拘わらず、何か確実なものがこの世のなかにあるかのように思い込んで生きていますと、必ず愚痴や、文句や、恨みや争いが出て、最後には人生を失望で終わることになります。これこそ敗北の人生です。

×

×

「神」とは、この世においても、あの世においても、確実に信頼できるものを指す言葉です。

神とは愛の固まりであり、愛の働きです。ですから、聖書は「神は愛である」と示すのです。

神というお方が、ほんとうに在るか無いか、という理屈をどれほど論議しても、なんの意味もありません。大切なことは、生死を通じて私たちが信頼できる愛の働きの気づくことです。

×

×

人の愛は、とても打算的です。限りなく自分心の奪う愛こそ人の愛の正体です。そのような愛は何時にも失望落胆で終わり、より大きな憎しみと醜悪な争いとを生まみます。

×

×

しかし、この世の中に真実の愛があります。それは、派手に人々の表面に現れているものではなく、とても地味で、控えめで、よく人が見据えないと見えない愛です。人がどのようにに関わり思おうとも、いつまでもその愛は変わることなく、私たちを包み、救し支え、喜びと安心に生かそうとする愛です。この愛の働きこそ神なのです。それ故にイエスさまは、「神の愛の内に留まっていなさい」と示されるのです。聖書に語られているイエスさまの十字架の死と復活の出来事は、神の愛とその確かさを、私たちに示しています。

この世とあの世に於いて、私たちを安心の内に生かして下さるのは、神の愛だけです。

よく完成させたい と思うなら

松下昌義

なにごとについても、それをよく始め、よく続け、よく完成させたいと願うなら、すべてを神の恩恵にお任せすることです。

神に対する畏敬の思いをもたずして事をおこなうとき、好ましく事が進めば当然の事として傲慢になり、失敗すれば不運だと嘆くことになります。しかし、神の恩恵にお任せし努力して事にあたる者は、好ましく事が進めば、神に感謝し、神をほめたたえます。また、失敗するとき、そこに神の声を聞き、反省の機会となし、失望することなく、神の導きを仰いで立ち上がります。

いつも神との親しさを保っている人は、どのような時のうちにも、どのような事に於いても、神の声をそこで聞き取ろうとします。利己的な自分の思いに支配されるとき、傲慢と不信、疑いと恨み、攻撃と不安、恐れなどがその人を包み、神の声を聞くことができなくなります。しかし、神との親しさを保っている人は、神の恩恵が自分を支配し、どのような出来事の内にも、喜びと感謝、希望と祈りに導かれ、知恵ある生き方ができるよ

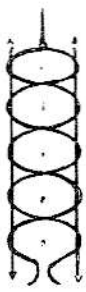
うになります。

ものごとをよく始め、よく進め、よく完成させるといふことは、人々からの賛め言葉を得ることや自分の利己心が満足できるようになることではなく、神によきこととして受け入れられるように生きることです。

神に受け入れられることだけが、この世を超えて、天の国まで持参できるものです。天の国まで持って行ける善のために、人はこの世で働かなければなりません。そのための働きを明日にのばそうと思っはなりません。ひよっとすると、明日は私にとって来ないかも知れないからです。

自分の身をどこに置くかということは、自分の靈魂をどこに置くかということです。あなたが、神のよしとされる善なる場に自分を置く時、あなたは知らないうちに、自分自身が聖められていることに気づくでしょう。

なにごとについても、それをよく始め、よく続け、よく完成させたいと願うなら、神の恩恵にお任せすることです。



悪口を言わない

松下昌義

誰かについて悪口を言うことは、自分や他人を汚し、周囲に暗い想念をまき散らすことになりま
す。悪口からは、善きことは決して生まれ来ま
せん。悪口を言った分だけ、その人は自分自身を
真から離れさせ、神から遠ざけているのです。

悪口を言うとき、いちばん悲しんでいるのは自
分の魂です。悪口を言った分だけ、自分の魂の輝
きは失われ、暗さが増します。悪口を言う人の心
には憎しみや、怒りや、嫉妬など、否定する心だ
けが働いています。

「悪口」と「批判」

X

「悪口」と「批判」とは違います。二つを混同
してはなりません。ことがらを根本から検討し、
善いところと悪いところを明確にして、本来ど
う在るべきかを示すことが「批判」であります。

悪口は、利己的な感情が人を支配しますが、批
判には深い「智慧」が必要です。智慧のない者が
批判すると、悪口になってしまいます。

智慧とは、神を畏敬する智慧、日常の生活での
問題を正しく処理できる智慧、どのような状況に
あっても正しい目的と方法を判断し、試み、選択
出来る智慧のことです。

X

X

このような智慧を自分に頂くことは、難しいこ
とではありません。だれでも、本当に求めるなら
必ず神さまは下さいます。

「智慧」は「知識」ではありません。知識は理
屈の世界です。しかし、「智慧」は、真を信じて
求め、習うとき、与えられることです。

あなたがたの中で、智慧の欠けている人が
いれば、誰にでも惜しみなくとがめだてし
ないで、お与えになる神に求めなさい。

—ヤコブの手紙一章五節—

イエスさまの言葉や生き方に目を向け、耳を傾
けると、かけがいのない自分の人生に於いて何
を大切にし、どのように物事を判断し、対処すれ
ばよいのかという「心豊かに生活する智慧」が必
ず与えられるでしょう。

悪口は人を争わせ、汚し滅ぼします。しかし正
しい批判は、人を謙虚にさせ、魂を輝かせ人生を
豊かに恵ませるでしょう。

思いやり

松下昌義

人間関係にかかわるどのような問題も、その原因をたどって行くと、「相手のことを思いやりでない自分中心の態度」にたどりつきます。

知って行かう利己的な態度は論外です。問題は、その人自身が気づいていない、その人の、他人にたいする思いやりのない言動です。

わたしたちは自分が知らない間に、言葉や態度によって、他人の心に傷をつけていることがあります。何ヶ月も経ってから、「あの時の、あなたの態度（言葉）には腹がたった。悲しかったし、夜も眠れなかった」などと、聞かされ、驚くことがあります。

このような時、「申し訳ありません。あなたが怒るのも当然です。わたしはそのようなつもりで言ったではありませんが、悲しませて、ごめんなさいね」と、すなおに謝ればよいのです。そうすれば、二人は以前に増して信頼関係をふかめることが出来ましょう。しかし、そのような場合

「それは、あなたの受け取り方が間違っていたのだ。私はそのようなつもりで言ったのではない。あなたは勝手に誤解して、怒り、悲しんでいただけだ」などと、自分の正さばかり語り、相手の思いを受け取ろうとしなければ、二人の関係はますます険悪になってしまいます。

×

×

私たちは、互いに信頼し合うことを願っています。その信頼を生み出すものは、相手に対する思いやりの心です。また、私たちが日頃の人間関係で求めている事は、教科書のような正しい答えでなく、互いの心や思いが通じ合い、共感出来ることです。それを生み出すのは、相手に対する思いやりの心と言動です。

思いやりの心はすべてを結ぶ帯であります。思いやりの言動ができる人は、本当に賢い人です。思いやりの心があるところには平和があり喜びがあり、神さまがいらっしやいます。

『愛する兄弟達よ。よくわきまえていなさい。だれでも、聞くに早く、話すに遅く、怒るに遅いようにしなさい。人の怒りは神の義を表現しないからです。』と聖書は提示します。本当にそれとおりでだと思います。

私は 神に対して 何をしたか

松下昌義

「わたしは神に対して何をしたか」と、自分に問うことは、とても大切なことです。自分に対するこのような問いこそ、自分自身を本当に育てることになるのです。そのようして育てられた私たちの靈魂は、必ず光り輝き、生死を超えて永久に祝福されましよう。

さまざまなきびや悲しみ、忍耐や苦勞、成功や歡喜を味わって来たその内容が、ただ自分自身のことだけに留まっているなら、それらのことは、この世に於ける自分の肉体の死とともに、すべては消えてなくなってしまう。

この世に於いて、自分のためにだけしてきたことは、それがどれほどのことであつたとしても、自分の靈魂の養いにはならず、肉体の死とともにすべては虚しく消え去っていきます。

× 「わたしは神に対して何をしていたか」と自分に問うことは、自分の人生を本当に反省することになります。

人に隠せても、神には隠せません。神はすべてを見、すべてを知り、すべてを聞き、すべてを感じ

じておられます。神の前にはどのような思いも、言動も真昼の太陽のもとにあるごとく明らかにされていきます。ですから、神に対して生きるとは、罪を犯さず、完全な姿で生きることではなく、間違いだらけ、欠点だらけの自分をよく知り、それ故に、神に畏敬の念を抱き、赦しを請い、活かされている喜びと感謝、活かして下さる希望と力を覚えて、一生懸命に生きることが、「神に対して生きる」ということです。

× 「人に対して何かをしてあげよう」とするときにも、ただ、人が人にするだけで終わるなら、「した人」と「された人」との関係だけに留まりま

× す。人に対して何かをしてあげようと思うとき、その人の肉体と靈魂とが神様に祝福されることを願って関わる時、それは神に対してしたことになるのです。

「わたしは人に対して何をしたか」「わたしは人から何をしてもらったか」という思いだけに留まってはなりません。大切なことは「わたしは神に対して何をしたか」という、自分自身に対する問いかけです。「地上に宝を積むな。天にあなたの宝を積みなさい」と言われたイエスキリストの言葉が聞こえて来ます。



天に駆けのぼる者

松下昌義

自分の靈魂をゆたかにする秘訣は、**真実に思い**を向けることにあります。神に思いを向ける人の魂は神の手で守られます。神の恵みは悪を行う人の魂には届くことはありません。その人の悪が神の恵みを拒否しているからです。

この世の事柄の虜になつてゐる人の身体には、神の思いは住みつくことはありません。神のまことに生きようとする人の心身は清められ、その身体は神の栄光をあらわすために用いられます。そのような人は、早くこの世を去つても、人には苦しみの中に去つたと見えても、その魂は**歡喜と平安**を頂いて神の恵みの内にいます。

この世で**富栄**えても、天に宝を積むことをしていなければ、**真実なる神の御前に立つ**ことは出来ません。そのような人の靈魂は汚れて瘦せこけ、自分の手で自らを滅びの墓穴に運ぶことになりましょう。

神は裁かれませんが、神は愛です。神は恵みです。神は愛と恵みをもって人々の魂に神は呼びかけておられます。人生のあらゆる出来事と機会とを通

して神は、私たちのひとりひとりの魂に呼びかけておられます。

喜びのなかに、悲しみのなかに、苦しみのなかに、神のよびかけの声を聞くことができる耳をもつ者は幸いです。

神の愛と恵みとを知る人は幸いです。神の愛と恵みとを**讚美**できる人は更に幸いです。神の愛と恵みとを人の靈魂に伝え分かつことができる人は最も幸いです。それらの人は、その業によって自分の靈魂をゆたかにさせ、救うことになるのです。彼の靈魂は永遠に喜びと平安とを得て、神の愛の内に生きつづけるでしょう。

この世は素晴らしいものです。神の恵みで満ちています。神の知恵が漲っています。その不思議は極め尽くすことはできません。しかし、神を知らぬものには、この世はすべて自らの利欲を満たす為の物であり、道具にしかすぎません。彼にとつては、この世は**貪りの対象物**です。だが、神の愛と恵みとを知っている者には、この世のすべては感謝すべき神の賜物であります。彼はその賜物を感じて用いることによって、栄光の天に駆けのぼって行きます。

あとがき

本書は松下昌義牧師が「みちしるべ靈操」に書かれたものの一部を取り出し冊子にまとめたものです。

日頃、牧師が、説いてくださる聖書の教えが具体的な例を通して書かれてあり、読み終わったときに、必ずおちつき、謙虚な気持ちになるでしょう。みなさまのお手元でお役に立ちますようお願い致します。

今回、編集にたずさわり、もう一度読む機会が与えられましたことに感謝いたします。また製作にあたり、林順子姉・熊田淑子姉の積極的なご奉仕に深く感謝いたします。

二〇〇二年五月一日

瀬川知子

みちしるべ文庫 二七

『生き方が変わる』

二〇〇二年五月一〇日 発行

著者 松下昌義

発行所 左京きりすと教会

京都市左京区下鴨南茶の木町二九

電話(〇七五)七八一―九六四〇